

とぎには、辛口

7

◆磯田順子さんの手紙

去年の夏磯田順子さんから長い手紙をも
らった。

磯田さんはシドニー・オリンピックにも出
場した水泳の名選手である。シドニーでは折
悪しく持病の腰痛が出てふるわなかったが、
平泳では全日本や全日本学生で何度も優勝
している。去年の三月に水泳は引退して就職
活動のために留年、しかしその就職も四月に
はきまってしまい（キリンビールとのこと）、
単位はほとんどとっているので、七月からし
ばらく小笠原の母島に民宿のアルバイトをし
ながら滞在しているとのことだった。

たいへんきれいな字で書かれたその手紙は



松本道介
Michisuke Matsumoto

まず母島の紹介ではじまる。母島は東京の南
約千キロ、面積は練馬区の半分以下で人口は
五百人足らずだという。

小笠原・母島にて

「自然が素晴らしく、自然によって人間が
生かされているのを感じます。植物、動物、
魚……ここでは人間以外のたくさん生きも
のと出会うことができます。その名前や生態
に私は詳しい人ではありませんが、母島に来
てからは「この鳥は何というのかな?」「あ
の花は何の花かな?」と思うようになりまし

た……」と、自然のまったただなかになにか胸
はずむ思いで生きている様子がしるされてい
る。

「あと、忘れてはいけない「美しいもの」
があります。それは海です。それに空に見
えるものたちです。まず心を奪われたのは星
でした。電灯もない、人も見えない暗い場所
に立って空を見上げると、プラネタリウムの
ような星空をみることが出来ます。また月が
美しい夜は島が月の光に照らされて明るくな
るんです。東京ではわからない「月の光を浴
びている」感じも実感できるんですよ。月か
らパワーをもらっているような気分になりま
す」という素晴らしい文章が続くのだが、私
は、六十年前の小学生時代を思い出していた。
目黒区の八雲小学校にかよっていたが、当
時は、東京の町なかでも「月の光を浴びる」
ことができた。月の光が地面につくる人の影
がくつきりと見え、その影を踏み合う「影踏
み」という遊びまであったのだ。星がよく見
えたから星座や星の名前もよく知っていたし、
昼間はいろいろな種類のトンボが飛んでいた。
トンボの羽や胴体はそれぞれに美しかったか
ら、これは何? あれは何? という好奇心

がおのずとわいてきた。「やつぱり人間は好奇心を持っていてこそ、生きていけるといえるのではないかと思いました」と磯田さんも書いていたが、私の子供の頃はまだまわりになまの自然がいっぱいあり、そこにおのずから湧く好奇心の延長として学校の勉強があった。それにくらべて今の小学生はなまの自然に触れる機会はわずかだし、好奇心など持つ前からあれを覚えるこれを覚えると知識を押しつけられ、テストにつぐテストで試される。磯田さんはそのような世代だったせいもあって、学生生活の最後の年に母島へ行き、母島の自然に触れたことが実に新鮮な体験になったようだ。

最上の卒業旅行

なぜ母島滞在を思いついたのかは書いてないが、卒業旅行としては最上のものだと思うし、何よりも磯田さんが一番肝腎なこと気づいているのが素晴らしい。「東京にいては、いろいろなものが素晴らしい。東京にいないなどの建物、夜でも明るい電灯やネオン、そして私達人間に邪魔されてなかなか自然を

感じる事ができません。でも、たまには自然の力を借りて自然に身を任せてみる時間も大切ではないかと思いました。そうでなければ人間ばかりの世の中、人間中心、自分中心で一体何が一番大切なのか分からなくなってしまうし、そしてそれはすごく怖いことのように思いました……」

また磯田さんは大自然の中に身をひたすことによつてみずからの水泳人生をじっくり見つめ直したようだ。彼女の水泳人生は二十一年間だという。二十二歳の磯田さんだが、なんと生後六ヶ月でスイミングスクールに通いはじめたそうだ。その競技人生に後悔がないと言えば嘘になる、とりわけオリンピックに出場しながら、結果として世界と闘えなかった悔しさはいまも残っているが、水泳をやつてよかったという思いの方がはるかに強い。とりわけ目に見える結果以上のものを大切にすることを学べたことが大きいと磯田さんは書いている。

なるほど私も水泳部の選手と話していてこれに通じることを感じる。つまり当のレーズで優勝すれば嬉しいには違いないが、そこにもうひとつ自分の泳ぎという基準があつて

自分として納得のゆく泳ぎだったかどうかという感想に出会うことがよくある。それは必ずしもクールに自分を見るというのではなく「中大がむしやらになつて頑張れたからこそ感じる事ができた」思いだという。

二十二歳でこんな手紙の書ける磯田さんは本当に立派だ。水泳の第一線選手としてやってきたことで何倍もの人生経験をつんでいる感じがするし、卒業旅行(?)に母島のような場所を選んだのは大正解だったようだ。磯田さんにあやかつて、来年春に定年を迎える私も母島へ出かけて自分の教師人生を見つめ直そうと思つている。

ただ磯田さんの母島だよりでひとつ気になったのは紫外線の強さである。磯田さんのことだからさぞかし毎日泳いでまっ黒に日焼けしていると思いきや、まったく日焼けしていないという。いや絶対に日焼けしてはならないのだそうで、海に入るときは長袖長ズボン靴下といういでたちでなければならぬ。オゾン層破壊の影響だろう、紫外線の強さが東京の七、八倍ある母島ではただの水着で泳ぐのはたいへん危険らしいのだ。

(文学部教授)